

## 月の花挽歌 ～11. 月光川～

### 11-4

夢の中で父の朝雄が導いてくれた月の川の名を映画の挿入歌と同じ“ムーンリバー”だと言いつつ示唆が、どのような記憶に起因しているものなのか。そして、娘の一言に怒りをあらわにしたのか……。

月山から吹き降ろす年明けの寒風に缶ビールを持ちながら顔を曝していた真紀は、あれは死者が記憶の川で愛別離苦を伝えたかったのか、それとも彷徨い人の咆哮だったのかもしれないと自問自答していた。

いつものように父と仙台のチェスクラブへ出かけた際に、運転中の父が映画の看板を見かけたのがきっかけで、リバイバルされていた『ティファニーで朝食を』を鑑賞することになったのは、母の登紀子が亡くなる前年にあたる1978年の真紀が10歳の誕生日の日だったので、今でも覚えている。

4月にオープンした月山夏スキー場が、真紀の通っている小学校の夏休みが始まる7月下旬にクローズして、多忙だった旅館『D』も一段落したこともあり、4カ月ぶりの仙台行きとなった。

真紀はチェス大好き人間の父が、久々の例会を反故にしてまで取った行動の訳を聞きそびれてしまった。

かつて青葉区中央1丁目にあったH劇場の冷房の効いた館内で、主人公ホーリーを演じるオードリー・ヘップバーンに魅了された真紀はスクリーンへ引き込まれていった。

終演後のロビーで興奮冷めやらぬままの真紀に、父はパンフレットを買ってくれた。

映画館の近くにある喫茶店で、チョコレートパフェを食べながら、表紙がジバンシィのドレスを着て眼鏡のモダン（先セル）をくわえた小顔に紺色のオーバーサイズなカプリヌハットを被ったオードリー・ヘップバーンのエレガントなショットのパンフレットをめくっていた真紀は、原作者のトルーマン・カポーティについての紹介記事を読み終わると、何か言い知れない熱いものに揺さぶりをかけられた衝動に駆られて、向かいの席でコーヒーを飲んでいる朝雄に、少女らしからぬ鋭い眼差しを向けて言った。

「お父さん、私、この映画の原作を読みたい」

「……。原作かぁ～。なるほどなぁ」と朝雄は声と呼吸を呑み込んでからコーヒーをひと口すすり、肩で吐息をついた。